

飯田哲也先生をお送りするにあたって

産業社会学部長 篠田 武司

本日は、飯田哲也先生のご退職・最終講義の日でございます。最終講義にあたり、学部を代表いたしまして、先生のご紹介をさせていただきながら、先生への送る言葉とさせていただきます。

先生は、1936年富山市にお生まれになりました。大学は、法政大学社会学部に入学され、その後大学院に進まれました。そして、1969年法政大学大学院社会学研究科博士課程を修了されたあと、すぐに日本福祉大学に職を得られ、気鋭の家族社会学者として教鞭をとられることになりました。立命館大学の産業社会学部には、1981年にご赴任され、以来21年間学部の教学のためにご奮闘されてきました。

この間、先生の研究者としての歩みは着実なものでした。先生は、多くの単著、編著によるご本を出版されておられます。その生産性の高さに同じ研究者として本当に頭が下がる思いがいたします。その先生の研究者としてのお姿を評させていただくとしたら、まず第一に、先生はきわめて多彩な人だということです。先生の研究のテーマの中心は家族です。それは、社会関係の最小の単位としての家族こそ、先生がずっと追い求めておられる人間の主体形成がもっとも端的に問われる場だからです。しかし、先生は家族研究を進められると同時に、近年それを他の生活分野にまで広げられ、そこでの主体形成を探求されています。「生活力」という概念が、その際のキーワードとして提起され、先生の理論のなかに生かされていきます。家族から生活論へ、こうして先生の研究テーマが広がって行きます。そして同時に、なんといってもそれを社会学理論の確立という目的に添って展開されていることが、また先生の持ち味だし、理論家である所以かと存じます。

第二に、先生はまた、学問的好奇心の旺盛な人だということです。1992年の海外研修では中国に滞在されました。中国語をそのときに習い始められました。齢50才を過ぎてからの新しい語学への挑戦、これまた頭が下がる思いです。御本、『中国放浪記』で、われわれは好奇心あふれる飯田像に触れることができます。

このように、先生はそのバイタリティで多くの学問上の貢献を残されてきました。それにたいして1992年には名古屋大学から文学博士の学位が送られています。

先生はまた学問においてだけではなく、産業社会学部の教学のために大きな役割を果たされてこ

られました。時には、学部のご意見番、大久保彦左衛門となり、時には学部内の先生方の懇親のためのコーディネーターとなり、常に学部内で様々にリーダーシップを取られてきました。皮肉でなく、本当に厚く学部としては感謝する次第でございます。

先生には、来年度、特任教授として引き続き学部の教学に貢献していただくことになりました。今後ともよろしく学部の発展にお力添えいただければ学部としてこれにすぐる喜びはございません。最後に、先生のご健康とさらなるご活躍を祈念いたしまして、先生への送る言葉とさせていただきます。どうもありがとうございました。

2002年1月9日